キラリ輝いてます！

―東日本大震災復興支援ボランティア編―

必要としているものを迅速に、かつ継続的に！

舘山（たてやま） 誠さん（阿諏訪）

宮城県石巻市市街地（4月20日撮影）

できることから始める

舘山さんは、震災後の4月から自身が代表理事を務めるＮＰＯ法人で義援金を被災地の施設に毎月送金するといった支援活動を続けている。「私たちは、障害者や子どもたちのような社会的に弱い立場にある人のために、私たちでできる支援を、私たちの方法でしていこうと考えました」と舘山さんは話す。

惨状をしっかり見てください

そこで、被災地にある障害者の施設や保育園など、至急の支援が必要と思われる施設をあらゆる方法で探すことから始めたという。そして、宮城県石巻市（いしのまき）にある障害者の自立を支援する作業所を運営するＮＰＯ法人を知るにいたった。「4月20日に、初めて被災地に行きました。その日、お会いした作業所の施設長に石巻市街が一望できる高台の公園に案内されました。眼下に広がる市街地の惨状を目の当たりにし、今までに味わったことのない異様な感情に押しつぶされそうになりました」と舘山さんは、その日のことを語ってくれた。その時、施設長に言われた「この惨状をしっかり見てください」という言葉が今も頭から離れないという。

作業所施設長（中）と舘山さん（右）

出会いが希望へ

震災の起きた日、施設長は、作業所の最上階に障害者を避難させた後、津波にさらわれていく人や車を目の当たりにしたという。その時のショックや作業所で命を預かることの重圧から、作業所の運営をやめようかと思っていたことを舘山さんに話してくれたという。「しかし、施設長さんは、私たちに会って作業所再開の希望がわいてきたと話してくれました。その言葉に私たちも共に頑張らねばという気持ちを持つことができました」と舘山さんは話してくれた。舘山さんたちとの出会いが、施設長の心を動かしたのであろう。

必要としているものを迅速に

その後、舘山さんたちは、宮城県石巻市にある保育園や同県名取（なとり）市にある障害者支援センターへと活動を広げ、現在は、3施設に義援金のほか、生活に必要な物資やＴシャツなどを届けているという。「私たちが主催するスポーツ大会に参加してくれた人たちが、この活動に賛同し、支援の輪が広がっているんですよ」と舘山さんは笑顔で話す。

「被災地を訪れるたびに、被災された方がたの表情が少しずつですが、明るくなっていくのがわかります。しかし、被災地はまだまだ、復興の兆し（きざし）が見えません。被災された方がたが一番必要としているものを、迅速に届けられるように私たちはこの活動を継続していきたいと思っています」と話す舘山さんの言葉に強い意志を感じた。

石巻市の保育園児と撮影
（一番左が舘山さん）